



優秀賞

静岡県遊技業協同組合
「授産施設製作商品の景品化による
障害者自立支援」事業



静岡県遊技業協同組合 理事長
佐原英雄さん



静岡県遊技業協同組合
社会貢献委員会
富田直樹さん

授産製品の継続的購入と景品利用を

障害者が働くことの喜びや生きがいの実感を得るとともに、自立の支えとなるよう、全国各地で行政や福祉関連団体が中心となり、さまざまな授産事業に取り組んでいる。しかし、その現状は、決して楽観視できるものではない。もともと、一般の事業よりも景気動向に左右されがちな側面が強いうえ、数年来続いている消費者の低価格志向が、授産事業へのしわ寄せとなって現われているケースも少なくない。障害者授産施設で作られる日用品や小物などの製品は、その多くが100円～200円という低価格を利点としてきた面がある。ところが、いわゆる百円ショップなどの伸張により、そのメリットを生かせられない事態が生じてきている。今後は、授産製品にも質の良さや消費者の目を引くようなアイデアが求められているといえるだろう。しかし、いずれにせよ、障害者の自立支援という社会的な動きは止めてはならないことはいうまでもない。

静岡県遊技業協同組合では、平成13年以来、県内の授産施設で知的障害者が作製した製品を買い取って組合員ホールに配布し、おもに端玉景品として活用している。昨年度までで、その購入金額の合計は1億1400万円に達し、授産施設の運営や障害者の自立にとって、なくてはならない事業となっている。

この取り組みは、県授産事業振興センターの販路拡大の施策に賛同して始められた。ハンカチ、箸置き、ぞうきん、コースター、竹炭、石鹸、プレスレット、キーホルダーなど、1点100円となる商品を県内の大小の授産施設にバランスよく発注して製作してもらい、県遊協で一括して買い上げ、1箱2万円として箱詰めし、組合傘下の全392ホールに配布。それぞれの製品には、授産製品であることがわかるシールを貼付している。それにより、端玉景品として来店客に提供するさい、障害者支援の必要性を訴えらるとともに、業界の社会貢献活動をアピールできる仕組みとなっている。

授産製品の発注は、毎年9月ごろに県遊協役員と県授産事業振興センターが協議し、作製する製品を決定。一度試作品を作り、それに改良を加え、毎年12月末に正式

通じ、自立支援と障害者福祉への理解浸透を図る



静岡新聞に事業が大きく紹介された



ホール景品交換コーナーに陳列された製品(静岡新聞)

発注をしている。製品決定に当たっては、県授産事業振興センターが実施したアンケート結果なども参考にしている。最近では、女性客の増加にともない、日常生活に活

用できる実用的な製品や、手のひらサイズの製品が人気だという。また、この支援事業に当たって、各ホールでは授産製品を説明するポスターを掲出したり、景品コーナーに授産製品を目立つように並べたワゴンを設置するなど、来店客への周知徹底を図っている。

「この活動を開始した当初は、お客様の理解もなかなか得られず、苦勞しました。しかし、活動を継続して推進したことにより、知的障害者の自立支援への理解が深まり、現在では授産製品が景品交換所に並ぶと、積極的に景品として持ち帰る方が増加しています。この活動をさらに継続して行うことで、知的障害者支援の輪が、ホールから地域全体に

広がることを願っています」

県遊協の事務局では、そのような手ごたえを感じるとともに、今後も本事業に意欲的に取り組んでいくとコメントしている。

単なる寄付行為ではなく、障害者の自立を促す授産事業の後押しという側面に加え、遊技客に協力と参加を呼びかけることで、障害者福祉に対する理解と意識の広がり志向している点が、この事業の大きなポイント。また、その支援が一時的なものではなく、継続的に実施されている点に価値がある。あわせて県遊協の全加盟ホールが一丸となって取り組んでいることも、この事業に対する真剣さを物語っている。今後は、より一層、遊技客を含めた消費者に受け入れられるような魅力ある製品の提案や地域全体で自立支援にとりくむ環境づくりに知恵を絞る必要があるだろう。